様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０１００５

研究課題名（和文）祭祀儀礼からみた唐代の藩鎮と地方社会の研究

研究課題名（英文）A Study of Fanzhen (Regional Military Governors) And Local Society in the Tang Dynasty from the Viewpoint of Ritual Rites

研究代表者
江川　式部（EGAWA, Shikibu）

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：７０４６８８２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国唐代の藩鎮が、在地で行っていた祭祀儀礼や祠廟保護の活動について明らかにすることにより、これまでほとんど考察されてこなかった、藩鎮の地域文化への貢献とその意義について、究明することを目的とした。研究の結果、藩鎮が自発的に在地の祠廟を再建し、いちど途切れた祭祀を復活させていた事実が判明した。またそうした在地の信仰に対して、唐朝は寛容であったことも確認できた。
この研究を通して、軍閥としての藩鎮の新たな側面が明らかとなり、唐から宋へと移り変わる混乱の時代の、地方社会とその伝統文化の継承を理解するうえで、重要な知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
藩鎮は、中国唐～宋初の歴史社会に極めて重要な役割を果たした政治体制であり、したがって、これまでも多くの研究が行われてきた。しかし従来の藩鎮研究は、その軍閥的性格の分析に関心が集中し、在地社会における藩鎮の文化的役割については等閑視されてきた。本研究によって、藩鎮が軍政のみならず、祠廟の保護・再建や祭祀を自発的に行っていたことがわかり、これまでの政治・軍事・経済面からの分析に加え、祭祀儀礼を通じた地方伝統文化の保護継承という、藩鎮研究の新たな切り口を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to ascertain Fanzhen's contribution to local cultures and its significance, which was hardly examined before, by revealing details of Fangzhen's rites and rituals and its activities to preserve shrines.The results show that Fangzen rebuilt the local shrines voluntarily, and restored rites and rituals, once lost and that the Tang dynasty was tolerant of the belief of the local people.
Through this study, I revealed the new Fanzhen's aspect as a warlord and gained an important insight into the turbulent period of the Tang-Song transition to understand the local society and its inheritance of traditional cultures.

研究分野：中国史

キーワード：唐代　礼制　祭祀儀礼　藩鎮　節度使　石刻史料　地方社会　地域文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１.研究開始当初の背景

藩鎮は、中国唐～宋初の歴史社会に極めて重要な役割を果たした政治体制である。唐代中期から宋初へと続く中国社会の変容を理解するには、この藩鎮体制の解明が不可欠であり、このため当該時代史研究では常に根本的研究課題とされてきた。近年では、陸続と発見される墓誌史料の充実を背景に、各藩鎮内部の人的・民族的構成や組織構造、地域的動向など、より個別的な研究が可能となってきており、従来の藩鎮体制研究の主流であった経済史・政治史的分析にとらわれない研究も行われ始めた。しかし主眼はやはり藩鎮と中央との関係如何に置かれており、藩鎮が在地の社会に果たした役割については、従来の経済史的・政治史的側面からの分析を踏み出せていなかった。

他方、中国礼制（祭祀儀礼）の研究は、東アジアの歴史世界を牽引してきた王権の特殊性の解明を目指し、1980 年代以後とくに研究が盛んとなってきた分野である。従来正史などの文献に比較的多く記事の残る歴代王朝の皇帝祭祀や外交儀礼を中心に研究がすすめられ、近年ではそれら研究蓄積をふまえて、皇帝を頂点に膨大な官僚組織を紐帯した礼制の具体像や、国家制度の支柱としての礼制と法制との関係、また外交に果たした礼制の思想的役割や秩序機能などが明らかにされてきた。

このように、従来の藩鎮研究・礼制研究においては、いずれも政治史的分析に力点が置かれてきており、藩鎮の幕職官や節度使たちが在地に伝わる祠廟を維持し、その祭祀を継続しながら地域の伝統文化を保護継承していた事実については、各地に残る石刻史料や地方志等の一定の諸資料群が存在していながら、ほとんど解明されていないという研究背景があった。

２.研究の目的

本研究は、従来究明されてこなかった藩鎮や節度使の地域文化への貢献とその意義について、彼らが各地域で関わっていた寺観祠廟の保護維持や祭祀儀礼の面から明らかにすることを目的とした。かつて中国河北省にある北嶽廟の唐碑を分析し、本来国家祭祀であった立冬祭を藩鎮が代わって執祭していた事実を明らかにしたが、その後、当時の寺観・祠廟碑の資料を網羅的に整理する中で、藩鎮幕職官や節度使が在地の祭祀に関わる事例の少なくないことに気づいた。従来の藩鎮研究は、その軍閥的性格に関心が集中し、在地社会における藩鎮の文化的役割については等閑視されてきたといってよい。これまで行ってきた礼制研究と、収集してきた廟碑等の礼制史料を用いながら、藩鎮研究に「文化面」という新たな研究視座の提供を目指すことを、本研究の目標とした。

３.研究の方法

本研究では、以下のような方法で研究をすすめた

（１）研究文献・石刻資料目録の作成

近年の隋唐礼制に関する研究動向を整理し、次に各種石刻に関する所在情報と研究史とをとりまとめた。とくに寺観祠廟に関する伝世文献と石刻資料の把握に重点を置いた。

（２）現地調査

上記（１）で作成した目録をもとに、中国・日本国内における所在・所蔵調査を行った。新出石刻や所在不明の石刻については、可能な限り現地調査を行う予定であったが、2020 年からの新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大によって、研究期間延長1年を含む後半2年間は、国内国外含め、現地に赴いての調査は行うことができなくなった。国内の各機関における拓本等の所在状況については知人を介して情報を得るなどし、また前半の 2 年間で行うことができた、以下の海外調査の成果を用いながら研究を進めた。

①2018 年 11 月：中国北京市内各機関調査
・首都博物館（唐代墓誌及び玉冊等石刻・遼代墓誌及び塔磚等石刻）
・北京石刻芸術博物館（唐代墓誌及び儒教石刻・宋～元鎮墓石）
②2019 年 11 月：中国北京市内各機関調査
・中国国家博物館
・北京天壇祈年殿東西廊内及び神楽署石刻、斎宮及び北宰亭内資料調査
・地壇公園：祈穀壇及び皇祇室地壇文物調査
・文物出版社読者服務部にて発掘報告書類収集
（３）個別研究
①唐五代藩鎮研究の研究動向
②中国王朝礼制の研究動向
③唐朝礼制の研究
④唐代の藩鎮と地方社会の研究
※具体的な成果については、以下「４.研究成果」欄を参照。

４.研究成果
（１）唐五代藩鎮研究の研究動向
近年の藩鎮研究は、次々と発見・公刊される墓誌史料の充実を背景として、藩鎮内部の人的・民族構成や組織構造、地域的動向、また仏教寺院等への関与など、これまでの正史など文献史料を中心とした経済史・政治史的分析にとらわれない研究が多く発表されてきている。しかしながら、唐後半期に中国内地に出現してくる藩鎮の意義について考えたとき、六朝以来の貴族政治の存在を指摘し、その貴族性を崩壊に導いたものとして藩鎮を位置づけた谷川道雄氏の研究はやはり重要である。谷川氏は唐朝が藩鎮体制を布いたのは、律令制の破綻という政治危機の克服のためであったとし、その背景に両税法による私的土地所有に対する収奪や、それをまぬがれるために行われていた影占、すなわち藩鎮に籍を置くことで官職を得て、賦税を免れていた富商や富農の存在があったことを指摘する。墓誌等の新出土史料を活用し、個別事例的な検証への取り組みが行われてきている現在であれば、藩鎮内部の人々の、商業や宗教など個別の活動にまで視点を下げた研究が、可能になってきていると思われる。かつての谷川氏の指摘が、個別具体的な形で検証可能な段階となってきた。
本研究に関しては、「谷川道雄著『谷川道雄中国史論集』下巻」（『唐代史研究』22 号、2019）を発表した。
（２）中国王朝礼制の研究動向
唐のみならず中国の歴代王朝では、国家が祭祀儀礼を行う際には、伝統的な礼学に基づく儀式次第があらかじめ作成され、それに沿って儀式が行われた。その意味で、王朝時代の中国において礼学は実学であったといってよい。しかし清朝滅亡に伴い、それまで王朝体制を支える実学として存在し続けてきた「礼学」は、思想・哲学・歴史などと同様の一学問分野となった。伝統的な精神文化のひとつとして重視はされたが、五四運動が始まると、「礼」を封建時代の政治社会規範であり新時代の足かせとする見方が強まり、学問分野としても等閑視されるようになる。歴史制度面からの関心は稀薄となり、加えて唯物史観の影響も深まるなかで、礼は旧社会における為政者の支配論理とみなされ、その後は永らく歴史研究の課題として意識されることはなかった。
近年の中国史研究における王朝礼制に関する研究の急激な増加が、主に 90 年代以後の中国経済の飛躍的発展と、伝統文化への回顧にあることに疑いはない。それは制度そのものに限ら

ず、服飾や建物などの実物面にも及んできている。今後はより具体的な「儀式」の中身に踏み込んだ研究に注目が集まっていくのではないかというのが、近年の研究動向からの展望である。

（3）唐朝礼制の研究―唐代礼書の編纂及びその性格―

歴代の中国王朝が、礼制と法制とを根幹とすることで、地方または対外的に国家としての求心力を保ち得ていたことは周知であるが、唐朝はどのように礼制を構築していたのか。また唐では、『開元礼』のような国家礼典と、実際に行われた「儀式」とはどのような関係があったのか、について検討した。

『開元礼』がどう構成されているのかを検討するにあたり、前朝には存在していたものの『開元礼』には収載されなかった「禋六宗」「高禖」「禳祭」に着目した。三者に共通する点として、いずれも国家礼典の大規模な再編の際に削除されたことがわかった。唐朝礼典の礼目の採否については、臣民のために行われる祭祀であるか、天・地・宗廟・先王廟・学廟に関する神格であるか、定められた時期に行われる祭祀であるか、そのいずれもが礼記や周礼などの古礼に明確な典拠をもつか、を条件としていたことが推察できた。

唐朝では、礼部尚書・侍郎や太常卿・少卿、また礼儀使らの、一般に「礼官」と呼ばれる人々が、祭祀儀礼の行政面を担っていたが、礼制の根幹となる『開元礼』などの国家礼典の制定を彼らが任されていたのではなかったこともわかった。「礼官」には、挙祭に関わる人々と、制礼に関わる人々とがいたのである。『開元礼』の場合は皇帝直属の集賢院で礼典編纂が行われ、太常寺で挙祭ごとの儀注作成が行われることで、その間の国家祭祀の通常運営に支障がでないよう配慮されていた。

また『開元礼』には、各祭祀儀礼の儀式次第が具体的な所作として記されており、設営などの準備段階から終了まで、儀式の流れにそって、各担当者の動きが詳細に書き込まれている。よってこれをみれば、一連の儀式次第がすみやかに再現できるかのように思われるのであるが、じつはそうではない。今回『開元礼』各所に散見する“如常”“如常儀”“如前儀”“如式”“如常式”という細部の省略について検討を加え、これらの省略にどの程度の規則性があるのか、また法律形式のひとつである「式」との関係が疑われる“如式”“如常式”とある部分について、彼此の関係の有無を検証した。その結果、現行の『開元礼』本文・夾注において、“如式”ないし“如常式”とある部分については、そのすべてが法律形式としての唐式を指すわけではないことが明確となった。

本研究に関しては、「『大唐開元礼』礼目の再検討」（『明大アジア史論集』23号、2019年）、「「唐代の礼官と礼学」（『アジア遊学』242号、2020）、「唐代前半期における儀注編纂について」（『金子修一先生古稀記念論文集』（汲古書院、2020年）、（「『大唐開元礼』にみえる“如式”“如常式”について」（『法史学研究会会報』22号、2019年）を発表した。またこうした唐代の祭祀儀礼の具体例を参考に、これらが後世どう引き継がれたのかを検討するため、『大金集禮』の条文について東アジア后位比較研究会にて「『大金集禮』巻五皇太后皇后」（2021 年）の報告を行った。

（4）唐代藩鎮と地方社会の研究

本研究において収集整理した唐代祠廟碑の中から、とくに邠州（陝西省彬県）姜嫄公劉祠と魏州（河北省大名県）狄仁傑祠の二廟に建てられた碑文をとりあげ、唐代後半期において地方の軍事・行政を担った藩鎮が、在地の祠廟や祭祀に関わる背景について追究し論文にまとめた。これらは藩鎮下の人心掌握や、唐朝への帰順を在地の人々に周知させること等を目的に、節度使が自発的に古廟を再建した事例である。またその際においても、朝廷に対して祠廟再建等の許可をとっていた様子はない。祭儀についても、魏州の狄仁傑祠で行われた田興による廟享などは、かなり独自色の強いものであったことが看取できた。

節度使が祭祀を行うことにはどのような意味があったのか。論文でとりあげた二つの事例は、それぞれに当時の藩鎮の事情があったのであるが、この事実を歴史の中でさらに俯瞰してみる

と、このとき節度使が祠廟を再建・保護したことで、廟は後世に存続することを得たという事実も判明した。

唐代においては、まだ地方における民間祠廟に対して、国家が主導して統制を加えることまでは行われておらず、一方で、国家が積極的にこれらを保護することもなかったとみてよい。礼制という視点からみた唐朝の地方藩鎮に対する行政的文化的支配については、かなり寛容なものであった。また宋代以後には、賜祠額等の手段を通じて正祠と淫祠とを区別していく、いわゆる祠廟統制が行われるようになるが、その前段階にあっては、在地で保護・維持されるかどうかが、祠廟祭祀と信仰存続の鍵を握っていたと考えられる。

ところで、研究協力者の石野智大氏は、唐の地方行政が州県体制から藩鎮体制へと切り替えられ、唐代史のターニングポイントとなった玄宗朝期において、その末端組織であった村落社会の内部構造や構成員の詳細を、「金剛経碑」（原碑は既に佚）碑文に基づいて分析し、そこに「郷望」とよばれる在地有力者の関与を明らかにした。その後、藩鎮体制が敷かれるに及び、こうした在地有力者が体制に取り込まれ、体制の一員として地方社会の維持を担っていったことは想像に難くない。在地有力者と藩鎮との具体的な関係性については今後の課題となるが、その際、仏教などの宗教文化面からの分析がやはり重要となってくる。

本研究については、江川式部「唐代の藩鎮と祠廟」（『國學院雑誌』122 巻 2 号、2021 年）、石野智大「唐代玄宗期の郷望と村落社会―河北省本願寺旧蔵「金剛経碑」の復原をもとに―」（『九州大学東洋史論集』49 号、2022 年）を発表した。

（5）本研究によって導き出された新たな研究課題とその展望

以上の研究から、以下の点が導きだされた。

唐代の河北地域では、藩鎮によって仏教寺院が保護されていた事実が、すでに松浦典弘氏（2010）によって指摘されている。本課題研究が明らかにしてきた藩鎮による地方祠廟の維持保護も同様のこととして理解できる。藩鎮による寺観祠廟の保護活動が、何を目的にどのように行われたのかについては、今後も個別事例的に検討していく必要があるが、唐～五代・宋初における中国の地方社会に根を張り続けた藩鎮という組織の新たな側面が、こうした在地の宗教文化の保護に見られることは、まず確認しておきたい。これはいかに力をもった軍閥といえども、軍事・行政・経済力のみでは、地方での求心力を維持することが困難であったことの裏返しと考えられるからである。

本研究では、唐朝がどのように礼制を構築していったのかについても、平行して継続研究を行ったが、唐朝は国家としての礼制を整え儀礼を行うことには注力していた一方で、国家祭祀に直接関わらない地方の祠廟やその祭祀については、統制をかけるようなことはしていなかったことも看取された。藩鎮が在地の祠廟を保護していた背景には、国家からの在地信仰への不干渉という事情もあったと考えられるのである。

唐代の地方社会における寺観祠廟と信仰、そこに関わる在地有力者、さらにそれらをとりこみ地方政権として勢力を拡大した藩鎮については、今後さらに多面的分析が求められることになる。研究協力者の石野氏が指摘する、唐代前・中期の在地有力者の存在と、その後の藩鎮支配を経て、中国の地方社会の祭祀宗教文化の伝統が、どのような人々によってどう継承され今日に続いていくのかも、今後の研究課題として追究していきたい。

さいごに、本研究において強く認識した事象を記しておく。唐代の藩鎮によって再建・維持された祠廟の中には、その後の王朝交替をくぐりぬけ、1960～70 年頃まで存続したものもあった。しかしその後の都市化によって廟が取り壊され、廟内に建てられていた碑刻のみが博物館等に収蔵され残されている。地域の伝統文化は、社会混乱や戦時下に失われるのではなく、その維持は在地の人々の意識や生活の在り方如何によることを示唆するものであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 髙瀬奈津子・江川式部	４．巻 第2号学系統合号
２．論文標題 『封氏聞見記』訳注（八）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 札幌大学研究紀要	６．最初と最後の頁 201－218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石野智大	４．巻 第49号
２．論文標題 唐代玄宗期の郷望と村落社会―河北省本願寺旧蔵「金剛経碑」の復原をもとに―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 九州大学東洋史論集	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石野智大	４．巻 第131編第2号
２．論文標題 書評　山根清志著『唐王朝の身分制支配と「百姓」』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 79－87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石野智大	４．巻 第130編第5号
２．論文標題 2020年の歴史学界 回顧と展望（中国－隋唐）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 212－218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川式部	4．巻 第122巻2号
2．論文標題 唐代の藩鎮と祠廟	5．発行年 2021年
3．雑誌名 國學院雑誌	6．最初と最後の頁 1－18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川式部	4．巻 第23号
2．論文標題 吉川忠夫『顔真卿伝－時事はただ天のみぞ知る－』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 唐代史研究	6．最初と最後の頁 152－156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川式部	4．巻 第242号
2．論文標題 唐の礼官と礼学	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 77-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 髙瀬奈津子・江川式部	4．巻 第12号
2．論文標題 『封氏聞見記』訳注（七）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 札幌大学総合研究	6．最初と最後の頁 98-84（逆ページ）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 江川式部	4．巻 第22号
2．論文標題 谷川道雄著『谷川道雄中国史論集』下巻	5．発行年 2019年
3．雑誌名 唐代史研究	6．最初と最後の頁 192-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川式部	4．巻 第23号
2．論文標題 『大唐開元礼』礼目の再検討―収載されなかった祭祀儀礼を中心に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明大アジア史論集	6．最初と最後の頁 114-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 江川式部	4．巻 第22号
2．論文標題 『大唐開元礼』の“如式”“如常式”について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 法史学研究会会報	6．最初と最後の頁 173-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 髙瀬奈津子・江川式部	4．巻 第11号
2．論文標題 『封氏聞見記』訳注（六）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 札幌大学総合論集	6．最初と最後の頁 164-138（逆ページ）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石野智大	4．巻 第23号
2．論文標題 唐代の里正・坊正・村正の任用規定とその内実―『通典』郷党条所引唐戸令逸文を手がかりとして―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 明大アジア史論集	6．最初と最後の頁 129-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石野智大著、周東平・黄静訳	4．巻 第六巻
2．論文標題 唐代県行政下“不良”的犯罪調査	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『法律史訳評』	6．最初と最後の頁 153-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 江川式部
2．発表標題 中国唐代の死生観―官人が撰した家族の墓誌・墓祭文から―
3．学会等名 國學院大學文学部共同研究　公開研究会　『死生観の歴史学―人は死をどのように捉えてきたか―』
4．発表年 2022年

1．発表者名 江川式部
2．発表標題 『大金集禮』巻五皇太后皇后
3．学会等名 第46回東アジア后位比較史研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 江川式部
２．発表標題 唐の弔祭と冊礼
３．学会等名 國學院大學国史学会例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石野智大
２．発表標題 唐代石刻題記研究の概況と実践
３．学会等名 「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」第3回研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石野智大
２．発表標題 唐代玄宗期の郷望と村落社会―河北省本願寺旧蔵「金剛経碑」の復原をもとに―
３．学会等名 法史学研究会第200回例会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 江川式部
２．発表標題 『大唐開元礼』礼目の再検討―収載されなかった儀礼を中心に―
３．学会等名 第63回東方学者会議（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 金子修一先生古稀記念論文集編集委員会	4．発行年 2020年
2．出版社 汲古書院	5．総ページ数 596
3．書名 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序	

1．著者名 小島道裕、田中大喜、荒木和憲、国立歴史民俗博物館	4．発行年 2020年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 432
3．書名 古文書の様式と国際比較	

1．著者名 津田資久・井ノ口哲也編著、江川式部、ほか9名	4．発行年 2018年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 341
3．書名 教養の中国史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	石野　智大 (ISHINO Tomohiro)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関